

A 語句の意味と読み

(1) 思うに・実は / 事情を説明するときに使う語。「ふた」の意味ではない

(2) 上手に～することができる(～するのが得意だ) / 可能・能力を表す。「よく＝しばしば」ではない

(3) すぐさま・ただちに / ×「つまり」と訳すと文意がずれる

(4) 秦の東にある関所(通行を検問する関門) / ここを出なければ秦の外へ逃げられない

(5) ちょうどその時・～になって初めて / ★「方角・方向」の意味ではない。最頻出のひっかけ

(6) 関所の通行を許す割り符・手形 / これを示さないと関所を出られない

(7) 案の定・思ったとおり / あとの「及ばず」とセットで、「追っ手は思ったとおり来た。しかし間に合わなかった」という流れをつかむ。「はたして…か」(疑問)とは別物

B 句法

(8) 使役 / 「使」 / 白文は「使人抵昭王幸姫求解」。「使 A B」=「AヲシテB(セ)シム」=「AにBさせる」

(9) 令・教・遣(このうち二つ) / 使・令・教・遣の四字をセットで覚える。書き下しでは「しむ」と送るのが基本

(10) 願望。「どうか～したい・～してほしい」 / 文末が「ん(む)」で結ばれるのが目印

(11) 「～する者有り」と読み、「～する者がいる」という存在を表す / 同じ形が⑬でもう一度くり返される。二人の食客の対比の骨組み

(12) 受身の助動詞「る」の連体形。「(昭王に) 釈された」という受身を表す / 「～を得たり」とつながって「釈されること

ができた」の意になる

(13) 逆接(～けれども・～が)を表す。白文の「而」は置き字で読まず、その逆接の働きが送り仮名「も」に表れている。 / 置き字なので読まないのが基本だが、教科書によっては「而れども(しかれども)」と読ませることもある。お使いの教科書の書き下しに合わせる

C 主語・指す内容

(14) 孟嘗君が客分としてかかえていた家来たち(食客) / 孟嘗君は数多くの食客をかかえたことで知られる。同じ「客」でも「客を出だす」の「客」は旅人の意なので混同しない

(15) 孟嘗君のために、昭王に対して / 「為に」=～のために

(16) 「之」=孟嘗君 / 追おうとするのは秦王(昭王) / 直前の「秦王の後悔して」に注目する

(17) 孟嘗君 / 逃げる側が「追ってくるのではないか」とおそれている

D 口語訳

(18) 使いの者を、昭王のお気に入りの側女のもとへ行かせ、囚われの身を解いてもらえるよう取りなしを求めさせた。 / 「～させた」と使役に訳しているかが採点的

(19) どうか、あなた様の狐白裘をいただきたい。 / 「君」は敬称で「あなた様」。友達への「きみ」ではない

(20) 関所の決まりでは、鶏が鳴く(夜明けの)時刻になって初めて、旅人を関所の外へ通すことになっていた。 / 「方に」を「～になって初めて」と訳せるかどうか

(21) 追っ手は案の定やって来たが、追いつくことはできなかった。 / 「果たして」=案の定、「も」=逆接

E 内容・記述

(22) その狐白裘を、すでに昭王に献上してしまっていたから。／直前の「嘗て以て昭王に献じ」が根拠

(23) 秦の蔵に忍び込み、狐白裘を盗み出して幸姫に献上した。(二十六字)／この働きが「釈放」につながる

(24) 鶏が鳴くまで関を出られず、待つ間に追っ手に追いつかれるおそれがあるから。(三十六字)／「夜半に函谷関に至る」と、秦王が追ってくるという⑫の不安を組み合わせる

(25) 鳴きまねにつられてあたりの鶏がみな鳴き、番人が夜明けだと思って門を開けたから。(三十九字)／⑩「関の法」を逆手に取った機転がポイント

F 文学史・故事

(26) 『史記』／司馬遷／孟嘗君列伝／『史記』は人物ごとに記す紀伝体の歴史書。形式（紀伝体）を問う出題もあるのであわせて覚える

(27) つまらない技能でも、時には役に立つということ。(二十三字)／転じて「取るに足りない技能（の持ち主）」とやや低く見て使うこともある。どちらの意味かは文脈で判断する

(28) 戦国四君／平原君（趙）・信陵君（魏）・春申君（楚）のうち一人／孟嘗君は斉の公子

【現代語訳（全文）】

孟嘗君は、使いの者を遣わして、昭王のお気に入りの側女（幸姫）のもとへ行かせ、囚われの身を解いてもらえるよう取りなしを求めさせた。幸姫は言った、「どうか、あなた様の狐白裘をいただきたい。」と。実は孟嘗君は、その狐白裘をすでに昭王に献上してしまっていて、ほかに裘は残っていなかった。

食客の中に、犬のように忍び込んで盗みをするのが得意な者がいた。その者は秦の蔵に忍び込み、狐白裘を盗み出して幸姫に献上した。幸姫が孟嘗君のために昭王に口添えをし、孟嘗君は釈放されることができた。

孟嘗君はすぐさま馬を走らせて逃げ去り、姓名を変えて、夜半に函谷関に到着した。関所の決まりでは、鶏が鳴く（夜明けの）時刻になって初めて、旅人を関所の外へ通すことになっていた。孟嘗君は、秦王が釈放したことを後悔して自分を追ってくるのではないかと恐れた。食客の中に鶏の鳴きまねが得意な者がいて、その者が鳴くと、あたりの鶏がみないつせいに鳴いた。そこで通行の手形を出して関所を出た。食事をするほどのわずかな時間ののち、追っ手は案の定やって来たが、追いつくことはできなかった。